

未来形はテンスなのか

井元 秀剛

1 はじめに

テンス・アスペクト・ムードは本来まったく異なる文法カテゴリーであるが、同じ枠組みの中で並列的に論じられることが多い¹⁾。実際同一の文法形式がこれら二つ以上にまたがる意味内容を表示したり、代用されたりすることがある。フランス語の複合過去は、本来完了アスペクトの表示形式であったものがテンスとしての過去の表示に用いられるようになった例であり、*Notre ami est absent ; il aura encore sa migraine.* (Grevisse)などは、テンス形式としての未来が「推量」というムードを表示するのに用いられた例と理解することができるだろう。筆者達のグループ²⁾はFauconnier (1984, 1997)、Dinsmore (1991)、Cutrer (1994)によって展開されたメンタル・スペース理論を発展させ、個別言語における時制形式の体系的な記述の方法を模索してきた。本稿はこの枠組みを紹介し、英語との比較を通じて、フランス語の未来がどのような性質を持ったものとして記述するのが妥当であるかの一考察である。

メンタルスペース理論におけるスペースの概念はあいまいであり、最近の *blending theory* では相当に拡張されてとらえられているが、ここでは「個々の述定が有効性を持ち、指示対象の値が計算される場」と定義しておく。Hier j'ai écrit une lettre. という発話では、hier という副詞によって指定され、発話者が手紙を書くという行為を行った場がスペースである。このスペースの内部で *je* の指示対象が何で、*lettre* にどのような対象を割り当て、*je* と *lettre* の間にどのような関係が結ばれるか、ということが決定されるのである。現在談話構成に關与するスペースとして *BASE*、*FOCUS*、*V-POINT*、*EVENT* の4つの基本スペースが想定されている³⁾。*BASE*とは談話を開始するスペースであり、発話者の *ici et maintenant* というように理解されるスペース、*FOCUS* はそれぞれの発話の述定がなされるスペースで、発話者が伝えたい情報の中心部分がここにおかれる。我々はテンスを持った動詞句が *FOCUS* を構築すると考えている。*V-POINT* とは *BASE* から *FOCUS* に直接アクセスできないときに一旦経由するスペースで、例えば *Il a dit qu'il avait acheté un livre.* において、彼が本を買ったスペースが *FOCUS* であるとすると、*Il a dit* の作るその直前の *FOCUS* が *V-POINT* となり、ここから新しい

1) 生成文法ではこれらは *INFL* という同一のカテゴリーに入れられ、動詞句の外項として機能する。

2) 井元、貞光宮城、田中英理、田村幸誠、初谷智子、横萩元秀の6名である。研究成果の一部は2000年10月21日関西言語学会のワークショップで発表された。

3) 以下、Cutrerの書き方に従ってこれらの大文字表記はスペースを表すものとする。

FOCUSにアクセスする、と考えるのである。EVENTとは記述される事態が起こったスペースで、アスペクト表現の時に問題になる。例えば、英語の現在完了を用いた経験の文、I've been in France.では、その経験を保持している現在の状況がFOCUSで、I am in Franceというeventが生じたスペースがEVENTである。

2 Dinsmoreによる3つのレベル

Dinsmore (1991)では、言語理解のプロセスを3つのレベルにわけて処理することを提案している。第一のレベルはcontextualization（コンテキスト決定）と呼ばれるプロセスであり、ここで言語構造がどのようなコンテキストのスペースに投影されるのかが決定される。第二のレベルはdistribution（分配）で、あるスペースに配置された表現内容が、どのように他のスペースに割り振られるかを決定する。第三のレベルはparochial processing（局所的処理）で、指示対象の割り当てなどあらゆる言語的操作はこの段階で行われる。この3つのレベルの違いを例示するものとしてDinsmoreは次の例をあげている。

(1) Bif believes that the unicorn ate his cat.

第一のcontextualizationのレベルでは、(1)の文全体がどこに位置づけられるかを決定する。おそらく、何か物語り世界で、BASEからみて時間的に同時の位置にこの最初のスペースが置かれることになる。第二のdistributionのレベルではBifの信念のスペースが最初のスペースの内部に配置され、the unicorn ate his catという事態はこの信念スペースに属し、最初のスペースから見た過去の位置にあるスペースの出来事として配分されることになる。そして第三のparochial processingのレベルでthe unicornやcatなどの指示対象の値が決定され、意味処理がなされることになるのである。

我々はこのDinsmoreの提案をもとに、parochial processingの定義はそのまま、contextualizationをBASEを基準にFOCUSの位置を決定するプロセス、distributionをFOCUSを基準にEVENTを配置するプロセスと新たに定義しなおす。このプロセスは個々ばらばらなものではなく、distributionのプロセスがcontextualizationのプロセスの中に統合されることもある、と考える。これにより(1)の従属節の部分の分配処理は我々のシステムでは、当初distributionによって配置された内容がcontextualizationのレベルに統合されて、ここでeatに過去形の形態が与えられるのである。

3 テンス・アスペクト・ムード

動詞が表現する内容を一つのプロセス（時間量をもつ状態変化）と見なした場合、そのプロセス全体を時間軸上のどの位置に位置づけるかの指令をテンス、プロセスのどの展開の側面に注目するかの指令をアスペクト、プロセスの実現に対する話者の判断をムードと通常呼んでいる。

これらの概念をメンタルスペースの枠組みの中で以下のように定義したい。

「テンス」：BASEからみたFOCUS、もしくは直前のFOCUSからみたFOCUS

の時間関係を指定する指令

「アスペクト」： FOCUSからみたEVENTの時間関係を指定する指令

「ムード」： FOCUSを基準に FOCUS以外の非現実の世界にEVENTを設定する指令

この規定によってわかるように、テンスは本来 contextualization のレベルに生じるものであるが、談話処理の過程で一時的に distribution で処理されることもある。これに対しアスペクトやムードは FOCUS を基準に設定されるので distribution のレベルにしか生じない。

4 英語の時制体系

英語の時制体系に関して次のような仮説をたてることができる。

- (2) contextualization に作用する標識は動詞の語尾変化で表され、distribution のレベルで作用するプロセスの標識は助動詞の挿入によってなされる。
- (3) 有標のテンスカテゴリーとして Past があり、無標のテンスカテゴリーとして Present がある。contextualization におけるテンスは語尾変化の形で表され、distribution における Past はアスペクト形式である have+pp で用いられる。
- (4) 有標のモーダルカテゴリーの一つとして Prediction が、無標のモーダルカテゴリーとして Fact があり、Prediction の標識は助動詞 will である。

5 英語の未来形

上記の体系は Cutrer のシステムを修正する過程で想定されたものである。Cutrer は未来を時制の一カテゴリー Future として認め、FOCUS が V-POINT より時間的に後であることがその価値であるとし、さらに Prediction という属性を持つ、としている。これに対し Present は FOCUS が V-POINT/BASE より前でないことがその価値であるとし、さらに Fact という属性を持つとしている。この違いは未来の予定を表す現在形の用法との対比で明らかにされる⁴⁾。

(5) The train leaves tomorrow at 6 o'clock.

(6) The train will leave tomorrow at 6 o'clock.

(5) は時制としては Present であるが、現在における未来の予定を表している。これは Present の価値が現在より前、すなわち過去でないという規定に矛盾しない。ただし (5) はその予定が Fact として述べられているのに対し、(6) はそれが Prediction として述べられているのだ、と Cutrer は説明している。しかし、(5) と (6) の違いが結局は Fact と Prediction の違いに帰着されるのであれば、ことさらに Future というテンスカテゴリーを想定せず、(6) を Present+Prediction と記述し、will を Prediction の標識である、とすれば済む。時間的に未来を表すことは、過去

4) 以下の英語の用例はすべて Cutrer(1994)からとった。ただし趣旨を変えない範囲で一部単語を入れ替えたところがある。

ではないというPresentの持つ価値と、Predictionであるから現在事実となっているeventの記述には用いられないということから導かれる。この仮定により、英語の形態的特徴として(2)を主張することができる。さらにCutrerのシステムでは説明できなかった従属節の時制のふるまいについての説明が可能になる。以下この点について論じたい。

Cutrerは一見すると説明の困難な間接話法における従属節の時制の形についての説明を行っている点ですぐれており、その説明はFauconnier (1997)でもそのまま採用されている。

- (7) John said yesterday that he was sick two days ago.
- (8) John said yesterday that he had been sick two days before.
- (9) John will announce next Monday that he was sick two days before.

CutrerはSpeech Verbeと呼ばれる伝達動詞は、強力なV-POINTを持つspeech space (以下SPと略記)を構築する、と仮定する。被伝達文におけるBASEである。そして従属節の表すスペースにアクセスするには3通りの経路(Access Path)があり、そのいずれをたどるかによって従属節の時制形態が決定される、とするものである。(7)-(9)において、he is sickというeventが成立しているスペースMをターゲットスペースとして、ここにアクセスする経路をたどってみよう。(7)はBASE Mという経路でアクセスしており、現在から見て過去なので過去が用いられている。(8)はBASE SP Mという経路をたどり、最初の経路でPastが、次の経路でもPastが与えられるためPast+Pastで過去完了の時制で表現される。(9)はSP Mで、現在から見れば未来であるが、announceする時点、すなわちSPからみれば過去なので、過去形で表現される。このようにCutrerはBASEから直接アクセスする経路とBASEからSPを通してアクセスする経路と、SPから直接アクセスする3つの経路を想定しているのだが、第一の経路の場合、SPから与えられるFactもしくはPredictionの属性とBASEから与えられる属性の間に矛盾が生じない場合のみ可能であるとし(Fact/Prediction原理)、SPにおけるV-POINTの強さを強調している。これによって次の文は非文になる。

- (10) *John said yesterday that he was sick this morning.

(10)はBASEからMに直接アクセスしている。現在から見れば過去であるからPastが与えられ、Factという属性を持つ。ところがMはSPからみれば未来の事態だからPredictionの属性をもって表現されなければならない。したがってFact/Prediction原理の違反により、この経路はたどれない。それで2番目の経路をたどって、he would be sickと表現されなくてはならない、とするのである。

ところがFact/Prediction原理は(9)が可能であることからわかるように、第3の経路にはかからない。もしそうだとすると、(10)の状況では第3の経路をたどった

- (11) *John said yesterday that he will be sick this morning.

も可能でなくてはならないはずである。ところが実際は従属節にwillが用いられた場合、そのeventはBASEから見ても未来でなくてはならないし、従属節が現在ならばそのeventは現在でなくてはならない。

(12) John said yesterday that he will be sick.

(13) John said yesterday that he is sick.

(12) (13)の場合の経路は従ってBASEから直接アクセスしたものであり、Fact/Prediction原理にも違反していない。また

(14) John said yesterday that he was sick.

について、CutrerはBASE MとSP Mの両方の結果とみることができ、それぞれ過去同時読みと過去過去読みに対応させている。この区別は副詞によって顕在化することがあり、(7)のようにagoが用いられたときはBASE Mであり、(15)のようにbeforeを用いるとSP Mになるという。

(15) John said yesterday that he was sick two days before.

ところが(14)のデフォルトな解釈は同時読み (=John said yesterday : "I am sick") であるのに、BASE Mからはこの同時読みは直接出てこない。

そこで我々は第三のSPから直接アクセスする経路を廃し、一見してSP Mと見たものは、第二のBASE SP Mによってアクセスしているのではないかと仮定した。(8)がPast+Pastという経路をたどるのなら、Past+Presentという経路もあってよく、英語の場合これが過去形となって実現すると考えれば、(14)のwasはPast+Presentの過去形であると理解でき、ここから同時読みが出てくる。確かに(7)と(15)のような違いはあるが、これもどちらもBASEからアクセスしたものであり、副詞による違いは経路とは直接関係しないと考えている⁵⁾。英語の過去形という形態の側からみると、この形態は単一のPastの実現形のみならず、Past+PresentおよびPresent+Pastの実現形でもあるということになる。

さて、(14)にSP Mのアクセスがないとすると、Cutrerのあげる例の中でSP Mとして残るのは主節が未来におかれた(9)と

(16) John will say that he is sick.

(17) John will say that he will be sick.

しかない。つまり主節が未来の時には従属節はあたかもSPから直接アクセスしているように見えるのである。

ところがもし未来がPresent(+Prediction)であり、distributionalな属性は統合に關与しないと仮定するなら、(9)(16)(17)のいずれもPresent(+Prediction)+Past=過去形、Present(+Prediction)+Present=現在形、Present(+Prediction)+Present+Prediction=will形というような形で実現したものと考えることができるだろう。このように考えるとBASEを時制および人称のdeictic centerであると定義することが可能になる。歴史的現在の説明にはBASEの移動という考えが示されており、その点からいっても時制の基準点はBASEである事が望ましい。だとすればSP Mの経路はかえって理論を煩瑣にすることにしかならないだろう。日本語のように間接話法のシステムが存在しないか希薄な言語では、SPからのアクセスというよりBASEが移動している、と考えた方がよい。しかし、少なくとも英語に関する限り、BASEは移動せず、間接話法にあっては人称、時制のdeictic centerの地位

5) FOCUSと副詞の関係については現在研究中である。

を保持しているのである。

以上のような体系全体の整合性を考慮に入れるなら助動詞 will は Prediction の標識であって、英語の未来形は Present+Prediction と分析されるのが妥当であると思われる。従って表題の問いに関する英語のケースでは「テンスではない」という結論になりそうである。

6 Focus shift

ただし Prediction が純粋なムードの標識か、ということになると必ずしもそうとは言えない側面も持っている。仮に完全なムードであるとする、distribution のプロセスで処理されることになるが、上にあげた定義からすると distribution で処理されるスペースは FOCUS となることができない。それに対し、通常未来とされる Prediction はそこが FOCUS となることも可能である。

(18) In the party I will meet a handsome boy. He will fall in love with me.

というように一連の談話が続けば未来スペースは明らかに FOCUS である。これは FOCUS が EVENT にシフトした、と考えることができる。このような現象はフランス語の複合過去、英語の過去完了等にしばしば見られる一般的な特徴である。このシフトが一般化すれば、contextualization のレベルで FOCUS を指定する、と解釈することもできる。この意味では本来モーダルなカテゴリーである Prediction が Present+Prediction として用いられるとき、これが Future のカテゴリーの標識と理解されるようになる、という文法化の途上にあるとみなすこともできるだろう。

それでも英語の場合、will の形式には Focus shift を起こしていない純粋に distributional な Prediction が存在する、と思われる。

(19) Jack'll be here somewhere.

(20) You look sleepy. I'll make some coffee.

(19) は推量の例であり、EVENT と BASE の時間関係は同時で、FOCUS はそのように推量しうる現在の状況にあると考えられる。(20) は意志を表す用法で、EVENT 事態は未来であっても FOCUS はそのような意志を表明している現在にある。(5) と比較される(6)の例は Focus shift が中間段階にある例と理解することもできる。現在のメンタルスペース理論では時間副詞は原則として FOCUS を指定する指標と理解されており、その点で(6)は tomorrow at six のスペースが FOCUS である、と分析される。一方(5)は現在から tomorrow at six にいたる全体が FOCUS であって、現在の予定を述べた文なのである。しかし、(5)と(6)の違いはその予定が Fact として表明されているか Prediction として表明されているかの違いだけであって、FOCUS の違いはあまり感じられない。このあたりは時間副詞と FOCUS の関係をどう規定すべきか、という問題であり、今後の研究課題となるだろう。

7 フランス語の時制体系

以上に展開した英語の時制体系に対する考察が、どれほどフランス語の体系に

あてはまるのかについて以下に見ておきたい。

まず、一見して明らかなようにフランス語は contextualization と distribution が英語ほど形態ときれいに対応していない。英語で確認した(2)(3)をフランス語にそのまま当てはめることはできない。Past の標識と思われるものの中には単純過去、複合過去、半過去があり、このうち複合過去は distributional なアスペクトの形態である助動詞によって表現されるし、ムードの表現を反映していると思われる接続法は、基本的に従属節の中に生じるとはいえ、形態的には動詞の語尾変化で表される。Cutrer はフランス語の単純過去と複合過去をともに Past+Perfective、半過去を Past+imperfective と分析し、単純過去と複合過去にテンス価値として区別を与えてはいない。しかし Grevisse (1975) の “Le passé composé (passé indéfini) indique un fait achevé à une époque déterminée ou indéterminée du passé et que *l'on considère comme étant en contact avec le présent*, soit que ce fait ait eu lieu dans une période de temps non encore entièrement écoulée ou que ses conséquences soient envisagées dans le présent.” (p.727) イタリアックは筆者) という記述をまつまでもなく、程度の差こそあれ、英語の現在完了にみられるような current relevance の特徴をそなえている。現在の理論では、複合過去は副詞と共に起るので、あくまで FOCUS は過去スペースにあると分析されるが、今後 FOCUS と副詞の研究が進むことである程度 distributional な性質を記述できる可能性も残されている。

さて未来形は通時的にみると英語同様ムードから派生してきたものである。ロマンス語の発達過程においてラテン語の未来の活用は消失し、迂言的な « habere+不定法 » の形から文法化が進んで、現在の未来語尾になった。当初表現していたのは義務のムードと未来であったが、やがて前者の意味が消失していった⁶⁾。形態的には英語に比べてより早く文法化が進み、現在は動詞の語尾変化の形で表現されている。とすると共時的な観点で現在の用法を記述する場合、形態的には contextualization における操作を行う Future というカテゴリーの標識ととらえることができそうである。事実 Martin (1981) をのぞけば、フランス語学の領域では未来形は通常テンスに分類されている。

英語に比べて Focus shift がより進んだ状態にあることは、(20)のような現在スペースが FOCUS となるような意志の用法はフランス語の単純未来にはないことからわかる。Franckel (1984), Helland (1995) による近接未来と対比した研究によってよく知られているように、現在と隣接した事行を表現するためには、単純形ではなく近接未来を用いなくてはならない。

(21) Tu as l'air fatigué. ??Je te préparerai un café.

(22) Tu as l'air fatigué. Je vais te préparer un café.

これは現在進行中の状態を FOCUS とすることができないことを示しているように思う。また青木 (1998) によれば、フランス語においても(5)(6)のような対立が存在するが、駅の案内所で列車の到着時刻などを問い合わせた場合、その返事は次のように単純未来で答えるのが自然だという。

6) この記述は主として Darmsteter (1934) によった。

(23) Le prochain train vous *fera* arriver à Paris à 6 heures 13.

(青木：1998 イタリアックも原著者)

つまり、ある事象の実現を前提にして、それが未来の何時であるかを問題にするとき、現在より未来が好まれるわけである。これなども未来時に FOCUS がシフトしていることの傍証になるだろう。

ただし、間接話法における Access Path で主節が Future の場合 BASE SP M の経路の場合の形態はまだ確立されていない。現実の Speech verb を用いた用例の中に直接生じるのは現在形、半過去形、複合過去形がほとんどで、未来形は生じていない。実際インフォーマントにたずねたところ

(24) *Marie dira qu'elle sera heureuse.

は、可能な文脈を与えてたずねても許容されず、(9)のフランス語訳をたずねても、être の時制をどのような形にしたらよいか判断が難しく、このような表現は回避する、という回答であった。今後さらなる調査や実例の検討を行わなくては確かなことはわからないが、フランス語の場合 Future+Present, Future+Past, Future+Future の形を未だそなえておらず、未来の場合可能な限り BASE からの経路をたどるようにしているのではないかと想像される。

結局のところ、英語と比較した上でのことにすぎないが、フランス語の場合は Future というテンスカテゴリーを認めてもよいように思う。ただし、メンタルスペース理論による時制体系の研究はまだ始まったばかりであり、今の段階では単なる見取り図を示唆することしかできない。今後の本格的な研究の成果がまつれるところである。

(大阪大学助教授)

主要参考文献

- 青木三郎 (1998) : 「現代フランス語の単純未来形の「多様性」について」『筑波大学文芸・言語学系紀要 文芸言語研究 言語編』34
- Cutrer, M. (1994) : *Time and tense in narrative and in everyday language*, (Ph.D.) University of California, San Diego.
- Darmesteter, A. (1934) : *A historical French grammar*, Macmillan.
- Dinsmore, J. (1991) : *Partitioned representations : a study in mental representation, language understanding and linguistic structure*, Kluwer Academic Publishers.
- Fauconnier, G. (1994) : *Espaces mentaux : aspects de la construction du sens dans les langues naturelles*, Editions de Minuit.
- Fauconnier, G. (1997) : *Mappings in thought and language*, Cambridge University Press.
- Franckel, J.-J. (1984) : «Futur 'simple' et futur 'proche'», *Le Français dans le monde*, pp. 63-70.
- Grevisse, M. (1975) : *Le bon usage grammaire française* (10ème édition), Duculot.
- Martin, R. (1981) : «Le futur linguistique : temps linéaire ou temps ramifié ?», *Langages* 64, pp.91-92.